【別世界】アナザーワールド

TINORI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【別世界】アナザーワールド

【Ｎコード】
Ｎ８５１８Ｚ

【作者名】
ＴＩＮＯＲＩ

【あらすじ】
朝日が俺の目に差し掛かる。
俺は眩しさにより目を覚ます。
そこは、知らない家だった。
「気が付いたんですね」
女の子が俺に話しかける。
「ここは？」
俺は辺りを見渡す。普通の木製の家のように思える。
「私の家です」

「ところで、何故貴方は学校の校庭の真ん中で倒れていたのですか？」
「え！？」
俺は驚いた。
俺はさっきまであの商店街にいたのだ。
それなのに校庭の真ん中で倒れていたのかが自分でも解らなかった。
俺はもう一度今日の放課後のことを思い出す。

人生の分岐点（前書き）

以前もこのサイトで小説を書いてましたが、過去の作品をすべて消しての新スタートを切りました。
どうぞ、楽しんで読んでください。

人生の分岐点

人生には分岐点が存在する。この街にいた俺も分岐点に出会った。
此処は、きっと貴方もよく知っているであろう街、カップルやら主婦等が楽しそうに日々を送る街だ。
そんな街に俺、柏木俊介（かしわぎしゅんすけ）は住んでいる。
俺のことを簡単に紹介するとすれば、高校生になる前に両親が他界してしまったので、
祖父に引き取られて、高校の寮に住んでいるだけの変哲もなにもない残念な高校生だ。
「しゅん。さっさと行こうぜ！俺、店で並ぶのは嫌だからな」
突如俺に一人の男子生徒が話しかけてきた。
その男子生徒の名は天ヶ瀬達也（あまがせたつや）。
俺の同級生で学校の寮の隣の部屋だ。
「はいはい。今行きますよ。」
そういって俺は達也と一緒にある場所を目指す。
只今俺は達也が学校帰りに一緒に寄りたい店があるとかでそれに付き合っている。
もちろん。達也が連れて行く店の場所を俺は知らない。
「それにしても、１１月の終わりにもなれば寒くなるな」
俺はそういって左手の腕時計を見た。現在時刻は１６時４８分。
何故携帯電話があるのに腕時計を見るのか最初は皆疑問に思っていたけど、理由は簡単。
俺の死んだ親父の形見だからだ。
死んで半年と少し経った今でも両親のことは覚えてる・・・・・むしろ仮に半年程で忘れていたらそれは人としてどうなんだ？
そんなことを考える俺の横で達也が「何行ってんだよ」と馬鹿にした風に言う。
それから暫く歩いて不意に達也が立ち止まる。

「着いたぜ、しゅん」
俺は達也の指差すほうを見る。
ぼろっちい占い屋だった。
「・・・・・・・」
俺は暫く開いた口が戻らなかった。
「よかった～。まだ人が並んでなくて」
「おい、た・つ・や・君？」
（何だよ～。俺はさっさと占って欲しいんだから話かけんなよ～）
みたいな目をこちらに向けてくる達也。
俺は少々イラっと来たが、落ち付いて達也に話す。
「お前、何が「俺、店で並ぶのは嫌だからな～」だよ！こんな廃れた占い屋にお前みたいな奴以外に誰が並ぶのかを俺に教えてくれよ！！」
俺が達也に文句を言った瞬間。
「廃れた店で悪かったわね！」
ガン！と気持ちのいい音が俺の頭の上で鳴った。
「いってええええぇぇぇぇ！！！」
俺は痛む頭を擦りながら俺の頭に拳を叩き込んできた女性に叫ぶ。
「いきなり初対面の人の頭を殴る奴がいるのかよ！」
俺がそう叫ぶと、
「ハイハ～イ♪こっこにいまぁ～す♪」
などとふざけた調子で答える女性が一人。
俺は自分の顔が怒りで引きつっているのが解った。
しかし、この占い師の女性、よく見ると。
「・・・・エロい・・」
そう、エロいのだ！！
胸なんか爆乳だし、腰もキュッと引き締まってて、尻もデカイし、
完璧なプロモーションを持つ二十歳前後のおそらく性格が残念そうな（俺の主観で）占い師がいる。
一人で勝手に物々喋る俺のことをほったらかしにして達也が占い師

に話しかける。
「すいません。俺たちのことを占ってください」
ニコニコ笑顔で話しかける達也に対して。
「嫌です♪」
こちらもニコニコ笑顔で却下したあああああ！！
「私、災難が起きそうな人しか占わないんです♪」
・・・・何故だろう、彼女の語尾の「♪」が激しくムカついている俺がいる。
エロい体を持ち、語尾がやけに、おそらく俺だけがムカついてるのであろう占い師に占って貰う為に粘り続ける達也。
すると、急に占い師が俺の方を向いて一言。
「貴方、もうすぐ死ぬわね」
「「・・・・・・え？」」
これには俺も達也もびっくりした。
仮にこの言葉を俺に言うとしてもこんな感じの筈だと俺は思っていた。
例えば「えっとぉ、貴方、もうすぐ死ぬわよ♪」みたいな感じだと思っていたら、
急に真面目に喋りだしたのだ。
「あの～もう少し詳しく聞かせてくれませんか？」
俺の発言に対して占い師は頷いて話す。
「貴方は今から一時間後にトラックに跳ねられて死ぬのよ」
俺は腕時計に視線を落とす。
現在時刻は１７時２３分。
つまり、俺は今日の１８時２３分頃にトラックに跳ねられて死ぬらしい。
「おいおい・・・そんなの信じられるかよ・・・」
顔がさっきのような怒りではなく恐怖によって引きつる。
「・・残念だけどこれは事実よ。・・・受け止めなさい」
俺は無意識に後ずさる。

次の瞬間、俺は急にパニくって（はっきりとは覚えてないが恐らく怯えていたんだと思う）占い師と達也の目の前から全力ダッシュで消えうせた。

「ハァ・・ハァ・・・ハァ・・」
俺は走って占い師と達也のいるところから逃げた。
今は自販機に手を突いて休んでいる。
半年前に両親を亡くした俺は無意識のうちに「死」というものが恐ろしく怖いものに変わっていた。
現在時刻は１８時００分。
商店街に音楽が流れた。
俺は堪らなく怖かった。
死ぬのが怖くて仕方がなかった。
あの占い師の前にいたら今すぐにでも死にそうな感じがした。
そういえば、達也を置いてきたまんまだったな。
もう少し落ち着いたらメールでもして謝ろう。
そう思っていた俺の携帯に電話が掛かってきた。
「・・・もしもし」
俺は電話に出た。知らない番号だったが出てみることにしたんだ。
『あっ俊介！俺！竜（りゅう）。宮崎竜（みやざきりゅう）だよ』
「竜・・・か」
竜とは俺の従兄弟である。
正直最後にあったのがいつかも覚えてないので、顔も声も覚えてなかったので解らなかった。
「どうしたんだよ、急に」
『いや、実はさ・・・』
？どうにもおかしい俺の記憶じゃあ竜はハッキリと物を言うタイプの人間だ。
歯切れの悪いのが俺には不思議に思えた。

『お前さ、昔、爺様が俺たちに話した「魔法の世界」の話を覚えてるか？』
「魔法の世界」の話？確かにそんなことを話されたのは何となくだが覚えている。
「確か、戦争中に飛行機で飛んでたら「魔法の世界」に少しだけ行ったとかそんな話だっけ？」
『ああ。俺、実ザザさ、そのザザザとにザザいてザザ様らザ絡が・・・』
急に電波が悪くなったのか？ノイズが混じりだした。
「おい！竜！何かあったのか？」
俺は電話に向かって叫ぶ。
『女の子には気をつけろ・・ガチャ』
ツーツーと機械音が電話から聞こえる。
「女の子に気をつけろ？」
もしかして、占い師のことなのか？
でも、何で竜がそんな事を？
「キャー！！」
突然悲鳴が聞こえた。
俺は声のしたほうに振り返る。
すると、そこにはある光景があった。
母親らしき人物が娘を抱っこしていたときにこけたのだろう。
それだけならよかった。
しかし、事はもっと悪い方向に進んでいた。
抱かれていた娘が道路にまで転がっている。
「どんなこけかたしたらあんなんになるんだよ！」
俺は叫びながら女の子を助けようと道路に飛び出す。
その時、クラクションが鳴った。それも、トラックの。
俺はトラックのほうを見た。そして、その奥に見える商店街の時計も見えた。
時計の時刻は１８時２３分。

そのとき、占い師の言葉が俺の脳裏を駆け巡る。
『貴方は今から一時間後にトラックに跳ねられて死ぬのよ』
そして、竜の言っていた事。
『女の子に気をつけろ』
俺は女の子を占い師だと思っていた。
けど、違った。
次の瞬間俺の目の前は真っ暗になった

人生の分岐点（後書き）

今回はあらすじの回想ですのであまりファンタジーはありませんし、
今後も王道展開になりますｗｗ
それでもいいなら続きを読んでくれることを祈っています

新世界（前書き）

ここからはあらすじの後の話になります。

新世界

俺、柏木俊介（かしわぎしゅんすけ）は確かに今日の放課後は天ヶ瀬達也（あまがせたつや）と一緒に俺が一時間後に死ぬと言ってきた占い師の所に行って怖くなり占い師と達也の所から逃げた。
その後は街の商店街の大道理の向かいにある自販機で休憩してたら昔会った従兄弟の宮崎竜（みやざきりゅう）から電話が掛かってきた。
その後は悲鳴が聞こえて俺が振り返ったら女の子が道路にいた。
それで俺は道路に出た瞬間にトラックに轢かれたはずだ。
それなのに現在、俺は見知らぬ少女の家のベッドで寝いた。
しかも、その少女が言うには俺は学校の校庭で倒れていたらしい。
「確か・・・竜は」
俺は最後に話していた竜との電話の内容を思い出す。
「爺さんの行った「魔法の世界」の事と女の子に気をつけろって・・・」
その言葉の意味の『女の子に気をつけろ』は解った。
でも、爺さんの「魔法の世界」がどうしても理解できなかった。
「いや、そんなことよりもさっさと寮に帰って達也に謝ろう」
俺は上半身だけを起こしていた体を動かしてベッドから立ち上がろうとした。
「！？・・・何だ？」
おかしい。さっきまで動けそうだったのにいざ、立ち上がろうとすれば急に体に力が入らなくなったのだ。
ガクッと足の力が抜けて俺は床に倒れこんだ。
「大丈夫ですか！？」
多分、俺の看病をしてくれているのであろう少女が俺を立ち上がらせてくれた。
そして、俺を静かにベッドに寝かせる。
「まだ動いてはダメなんですよ。姉さんの治癒魔法で完全に治って

ないんですから」
その少女の発言に俺は何らかの違和感を感じた。
しかし、少女はそんな俺のことは気にもせず話を続ける。
「びっくりしたんですよ。放課後の校庭に先生が集まっていたんですから」
どうやら俺が倒れていたときのことを話しているようだ。
「それなら何故、先生ではなく君の家で俺は休んでいたんだ？」
そう、俺はここでも疑問に思った。
おそらく俺は彼女の学校の校庭で倒れていたのだろう。（何故校庭で倒れていたのは置いといてだ）
しかし、此処で疑問が生まれる。
何故教師ではなく生徒が俺の看病をしているのかだ。
でも、大よその想像は付く。
彼女が生徒なのは殆ど間違いないだろう。
黒髪のショートヘアーで身長は俺の肩ほどのところに頭があったので女子の平均ぐらいだろう。
歳も多分同じだと俺は予想する。
なので、彼女ではなく彼女の話に出てきた姉が教師か何かなのだろうと俺は予想する。
と、そこでドアが開いて女性が入ってくる。
「お、気が付いたみたいだね」
俺の看病をしてくれた少女に似ている女性が入って早々に俺に話しかける。
黒髪は腰のところまで伸び、黄色いシャツのようなものを着ており、ジーンズに似ているズボンを履き、白いエプロンをしている。
俺には女性の着ている服が俺の知っている服に似ているのは間違いないのだが、何処か違う気がする。
俺の視線に気づいたのか、女性は俺に質問をする。
「さってと、教師として不法侵入者の君に質問したいけど・・・喋れる？」

俺は此処でどんな返答をすれば最良の選択かを考える。
しかし、仮に今答えなくてもいつかは答えなければならない。
だったらさっさと答えてしまおうと俺は決めた。
「大丈夫です。喋れます」
女性は俺の言葉を聞くと笑った。
「良かった～。私の見込みじゃあ後半日は喋れないと思ってたけど。
いやいや君の回復力はずいぶん高いんだね」
女性は俺がまだ喋れないと思って質問しても言いかと尋ねてきたのだ。だったら、後半日待てよ！
俺は心の中で女性にツッコミをいれる。
「じゃあ、質問。」
そこで女性は言葉を区切り、いよいよ『質問』・・・というより寧ろ俺にとっては『尋問』が始まる。
「あ！そうそう。言い忘れてたけど、このじんもゴフッ！ゴフッ！んん！ごめんなさいね。最近風邪気味なのよ、勘弁してね。」
今この人『質問』じゃなくて『尋問』って言ったぞおい！！
どうやら女性はこの『質問』という名の『尋問』を録音するらしい。
しかし、俺はそこで疑問が生まれた。
普通録音する際にはテープレコーダーとかを使うのだが、この女性の周りにあるのは紙と羽ペンのみ。
しかし、このことに疑問を持っているのは俺だけのようで、少女は普通にしている。
困惑する俺を無視して女性は質問をする。
「まず第一の質問。君は何故校庭に倒れていたの？」
女性が喋ったとたん俺は自分の目を疑った。
何と、羽ペンと紙が宙に浮き、見たこともない字を書いているのだ。
これのどこが録音なのか少々どころか大いに理解できないぞこれ！
いや、それ以前に物理の法則とかいろいろ無視してるぞこれは。
しかし、そんな不可解なことを無視して（無視していないとやってられない）俺は質問の返答をする。

質問は大体１０分程で終わった。
おそらく少女も女性も俺の話を信じないだろう。
彼女たちはトラックや商店街という物を知らないような雰囲気を出していたからだ。
「私は学校にこの録音したものを持っていくわ」
そこで区切り、女性は俺の方を見つめながら言う。
「１時間後に学校に来なさい。そこで貴方の魔法の特性を調べるから」
女性はさらに俺の横にいる少女に「エリア。彼を案内してあげて」と言った。
どうやら俺の看病をしてくれた少女の名はエリアと名前のようだ。
しかし、俺は気になる。
魔法の特性を調べる？
そこで俺はエリアという少女に聞いてみることにした。
「あの、魔法の特性って？」
少女は答える。
「魔法の特性とは、その人がどんな魔法を得意なのかを調べるんです。ちなみに私は氷と水の特性を持っています」
俺は魔法という単語に対して不思議と違和感を感じなかった。
普通の人は魔法と聞いて馬鹿馬鹿しいとか、そんな非科学的なことなどと切り捨てるだろう。
でも、俺は違和感を感じるのではなく、寧ろ懐かしい響きを感じた。
俺はエリアに魔法について様々な質問をした。
どうやって使うのか、どんな魔法の種類があるのか、誰にでも使える物なのかどうか。
俺は知らないうちにこの世界は別の世界なんだと感じていたし、帰れないことも感じていた。
だからこそ俺はエリアに魔法のことを聞いていたんだと思う。
「あ、そろそろ学校に行きましょう」
どうやら学校に行って魔性の特性の検査をするらしい。

俺はエリアの後ろについて木製の家を出る。
いつの間にか俺は歩けるようになっていた。
なるほど、俺の回復力は本当に高いようだ。
「ここからは森の中を行くので離れないでください」
「了解」
そう言って俺はエリアの後に続いて歩き始めた。
俺がこの別世界に来たときに最初にいた場所に向かって。

爺さんの遺産

俺、柏木俊介(かしわぎしゅんすけ)はトラックに轢かれたら魔法の世界にいました。
現在、俺を看病してくれていたエアリスという名前の黒髪のショートで俺が最初にこの世界に来たときに倒れていた学校の制服であると思われるものを着ている。
俺はエアリスの姉と思われる教師に学校にくるよう言われたのでエアリスが道案内をしてくれている。
俺とエアリスは森の中の道を延々と進んでいる。
唯、俺はエアリスにこの世界の歴史を聞いていた。
エアリスが言うにはこの世界は５００年ほど前に大きな戦争が起きたらしいが、この世界を治めている【ディーオ国最連盟】（略してディオ連というらしい）と反乱分子であった【エスペーロ】との戦争が有ったらしい。
しかし、ディオ連側に緑の竜を操り、右腕に魔の紋章を持つ勇者が現れ戦争に勝利したらしい。
俺はこのことを聞いてやっぱりどの世界にも戦争は起こるんだなと思っていた。
２０分程歩いただろうか、何やら門らしきものが見えてきた。
「着きました。此処が魔法学園「ウィザード・魔法学園」です」
そういってエアリスは門の前で立ち止まり、バスガイドのお姉さんのような笑顔で話す。
どうやらこの学校は俺の世界での中高一貫の学校のようだ。
大きさは・・・・・広すぎて見当がつかない。
俺とエアリスは門を潜(くぐ)り、学校の中に入る。
入って校舎へと続いてるのであろう道がある。
俺とエアリスはその道を進んでいく。
ある程度進んでいたら急に俺の頭に妙な痛みが走る。
「・・ッ！」

「大丈夫ですか？」
エアリスが心配そうに尋ねる。
何故だろう頭だけでなく右腕も痛み出してきた。
『聞こえますか？・・・私の声が、』
頭の中に女性の声が響く。これが俗に言うテレパシーってやつか？
頭が痛むんならあまり便利とはいえないな。
『聞こえているのでしたら返事をしてください！』
また声が聞こえる。声が聞こえるたびに頭と右腕の痛みが増す。
「もうやめてくれ！・・・お前の声は聞こえてるから話しかけないでくれッ！！」
俺は本気で叫んでいた。本気で叫ぶほどに頭痛が激しくなっているし腕の痛みも信じられないほどに痛い。
『よかった・・お願いです。今すぐ私の所に来てください！』
もう限界だ。俺は痛みのせいで、そのばにうずくまる。
『貴方が私の所に来れるように記憶に道を残します。・・・・なるべく早く私の居る遺跡まで来てください』
女性の声が聞こえなくなると同時に痛みが引いていった。
「大丈夫ですか？」
エアリスがまたも心配した声で尋ねる。
「ああ、大丈夫だ」
俺はよろよろと立ち上がり、エアリスに尋ねる。
「それよりも、この辺りに遺跡かそれっぽいものはないか？」
エアリスは暫く黙ると答えた。
「それならこの道を外れたところに戦争のときに勇者が最後に居たといわれる遺跡があります」
その言葉を聴いた瞬間俺の記憶にある道に関する記憶が出てくる。
「解った。ありがとう」
俺は一目散に走り出す。
まだ本調子ではないのだろう、すぐに息が上がってしまい走れなくなる。

それでも俺は遺跡に向かって走る。

5分ほど走ると遺跡らしきものが見えてきた。
「これだ、あの声が言ってた遺跡」
それは本当に遺跡だった。誰が見ても遺跡と答えるまでに遺跡の形をしていた。
俺は迷うことなく遺跡の階段を下りて、地下に向かう。
記憶にある道を進んでいく。
すると、広い場所に出た。
真ん中には祭壇の様な台がある。
その代の中央にカプセルのようなものがあり、中に女性らしきものが入っていた。
中に入っている女性のような物が入ってるカプセルの下には何かの文字が書いてある。
俺はカプセルに近寄り、埃を被った文字を見つめる。
「・・・これ、・・・・日本語だ」
そう、文字は日本語でこう書かれていた。
『この世界に来るであろう子孫達へ。
まず、この世界に君が来たのは偶然だがそれはやるべき事が有るからだ。
私の場合は戦争を終わらせること。
君の場合はどうかは解らないがこれだけは言える。
この世界の厄災を止めなければ君は帰ることはできない。
私は役目を終えたので元の世界に返り、残りの人生を過ごす。
この世界に来た君が困らないように私はあるものを君に贈る。
それは私の全魔力で作り上げた使い魔と魔力と特性を飛躍的に上昇される魔道書だ。
この魔道書のおかげで私は厄災を止め、帰ることができた。
魔道書の名は『オシリス』使い魔の名は君が決めてくれ。

魔道書は右腕で持てば右腕に宿り君を助けてくれるだろう。
使い魔も私の全魔力で作ったものだから心配は要らない。
君に一つだけ頼みがある。
どうか、この世界を守って欲しい。
この世界はとても素晴らしい。
君もこの世界の素晴らしさが解る筈だ。
最後にもう一つだけ。
君に出来ない事は無いと信じなさい。
そうすれば不可能も可能になる筈だから。
以上、柏木順平（かしわぎじゅんぺい）より。』
柏木順平。俺の祖父であり「魔法の世界」に行ったことのある人。
俺はカプセルに目を移す。
確かにカプセルには本と使い魔らしき女性が居る。
「解ったぜ、爺さん。」
俺は拳でカプセルを叩き割る。
拳は血で染まったが気にしない。
「この世界の厄災を俺が止めて、元の世界に返ってやるさ！！」
こうして俺の異世界でやる事が決まった。

使い魔と魔道書と俺

俺は今、魔法学園「ウィザード・魔法学園」の校舎へと続く道を外れた所にある遺跡の地下で見つけたカプセルの下に書いてある文字を見て俺は決心した。
爺さんの言う通りに厄災を止め、元の世界に返って見せると。
しかし、俺は此処である疑問が生まれた。
俺の爺様はもうボケてしまっているがまだ生きている。
でも、エアリスの話が本当なら戦争は５００年も前に起きていたはずだ。
この世界と俺の居た世界の時間の進みは違うのか、はたまた爺さんが時間を越えて戻ったのかは今の俺には解らない。
それに、このカプセルもとっくに調べられているのではないのか？
生徒ですら知っている遺跡の中にこんなのがあるんだ。
寧ろ調べないほうがおかしい。
暫く考え込んでいる俺の元へエアリスがやってきた。
エアリスはかなりびっくりした様子で言う。
「へぇ～。遺跡の中にこんなのがあるんですね～」
「え？知らなかったの？」
嫌々おかしいだろ！
遺跡の階段を直進したらたどり着くところだぞ！
知らないのはおかしいんじゃないのか？
「遺跡の中は何も無いと先生たちが言ってましたから」
なるほど。教師が遺跡はあるが近づくなとか言ったんだろう。
「あの～。そのカプセルどうするんです？」
エアリスはカプセルへと目を移す。
カプセルの中には女性のようなシルエットの使い魔と『オシリス』という名の魔道書が入っている。
「とりあえず開けないとな」

俺はエアリスにこのカプセルの開け方を聞いた。
おそらくは魔力か何かで開ける物だろうと俺は予想する。
しかし、今の俺は魔力の作り方？を知らない。
そこでエアリスに俺は聞いた。
「多分ですが・・・魔力を注ぎ込んで開けるタイプです」
やっぱりか、でもそれならエアリスに開けてもらえる。
俺はエアリスに開けてくれるよう頼んだ。
するとエアリスはカプセルに手を当て力をこめる。
その時俺は見た。
エアリスの周りに青い何かが蠢いているのを。
おそらくこれが魔力。
エアリスの魔法の特性は氷と水と言っていた。
なので魔力が青いのだろう。
エアリスが魔力をこめるとカプセルがいきよいよく割れた。
俺はとっさにエアリスをカプセルから遠ざける。
そして俺はカプセルの中にある『オシリス』の魔道書を右手で掴む。
次の瞬間俺の頭にまたしても声が響く。
『今この瞬間より、汝と我は一心同体となる。我を手にするとはこの世界の厄災を止める運命を背負うことになるが汝は構わぬか？』
俺は迷わずこう答える。
「ああ、俺は必ず厄災を止めて元の世界に返ってやる」
俺はそこで言葉を区切り、
「だから俺に力を貸せ！『オシリス』！！」
『了解した。これより我と汝は一心同体。汝が死ぬ時、我も死ぬ。我が死ぬ時、汝も死ぬ』
「解った。俺とお前は一心同体だ」
『ここに我との契約が完遂した。汝の名を教えろ』
俺は大声で叫ぶ。
「俺の名は！・・・柏木俊介（かしわぎしゅんすけ）だ！！」
『汝、柏木俊介と我との間に契約が結ばれん』

そう言った『オシリス』は俺の右腕に入り込み、右腕に紋章が浮かび上がる。
同時に俺の視界に変化があった。
俺の視界の右側にマントを羽織った得体の知れない何かがいる。
「おわあああ！！なんだよお前！！」
エアリスは驚いている俺の指差すほうを見るが、エアリスには見えてないようだ。
俺に対してマントの何かは答える。
『まったく、君はひどい奴だな、契約した魔道書のことをもう忘れるなんて』
マントの何かはやれやれといった感じで頭に手を当て頭を振る。
「お前・・・まさか『オシリス』なのか！？」
「えっ！？何かさっきと感じが違う」
『あれはカッコよさそうと思ったからあんな感じにしてただけだ』
何かがっかりしてるのは俺だけかな？
『それよりも俊介。早く使い魔の名を決めてやらねばお前のにはならんぞ』
「お・・おう」と俺は歯切れの悪い返事をして爺さんの残したもう一つのものに目をやる。
青い髪と青の瞳。歳は・・・・・１２歳前後だから俺の五つしたか。
・・・・まてよ、これは爺さんが作ったんだろ？
だとしたら爺さんは・・・・ロリコンだったのか！？
嫌だ！俺はこんな事実は知りたくなかった！！！
『俊介。今はそんなことで悩むときではない』
確かに『オシリス』の言う通りだな。
俺は１２歳ほどの使い魔に話しかける。
「おい、大丈夫か？」
使い魔はのそっと起き上がり俺を見つめる。
そして一言。
「私と契約しろ。ゴミ屑」

何か初対面の人？に罵倒された！！
俺は動揺を隠し切れないまま話を進める。
「け・・契約ってど、どうやるんだ？」
すると使いまではなく『オシリス』が答える。
『簡単だ。「お前の名前は～」といってからキスをする。それだけだ』
「キッ・・・キスだと！？・・・おい！俺の始めてを初対面にもかかわらず罵倒してくる少女に奉げろと言うのか！？」
『そうだ』
嫌だ、俺の始めては初めて出来た彼女が良かったのに。
畜生！恨むぜ爺さんよ～。
俺は使い魔に向き合う。
ま、名前なんて呼びやすいので良いかな。
俺は一つ咳払いをして使い間を睨み付けながら、
「お前の名前は・・・ティア、ティア・ファミリアだ」
使い魔は俺の言った名前を復唱する。
「ティア・ファミリア。ふむ、良い名だな。ゴミ屑・・・いや、ゴミ屑なマスターにしては良くやった」
俺は内心では怒りを抑えながら考える。
くそ、何でこいつはこんなに罵倒ばっかするんだ？・・・まさか、爺さんはロリコンでドMだったのか！？
だとしたらこいつの口調は納得できる。
ようし、理由がわかれば我慢も出来る。
俺は決意を固め、いざ、ティアの唇を奪う。
エアリスは恐ろしくびっくりしていたが俺は気にしない。いや、気にしてたら恥ずかしくて死にそうだったんだ。
肝心のティアの表情は・・・無表情！？・・・マジかよ。
俺はティアから離れた。
「フン、下手糞だな。まぁいい。これで契約は完了だ。マスターよ」
下手糞なのは初めてだからだよ！

ま、そんなことは置いといて、急がないとな。
こうして俺にはロリコンでドMな爺さんが残した遺産を持ってエアリスと一緒に学校の校舎にへと向かった。

異世界での人生の分岐点（前書き）

今回も話の進展がないですが、我慢してください。

異世界での人生の分岐点

俺、柏木俊介(かしわぎしゅんすけ)はトラックに轢かれて気がつけば爺さんであり、ロリコンでドMの柏木順平(かしわぎじゅんぺい)が救った世界に来ていた。
今は俺を看病してくれていたエアリスという名の少女と共に爺さんの残した『オシリス』って名前の魔道書と青い髪と眼を持つ12歳前後の少女であり、俺の使い魔であるティア・ファミリアと契約を果たしたところである。
俺の現在の目的はこの世界に訪れるらしき厄災を止め、元の世界に返ることだ。
ちなみに俺の視界にはマントの中に何かがある何かが俺の視界に映っている。
すると、俺の視線に気づいた『オシリス』がこう尋ねた。
『何か私に用かな？俊介』
俺は『オシリス』に思ってることを告げる。
「お前のマントの中身は何だ？まさか、ほんとにマントだけなのか？」
『いや、この中には人型の形をした身体が入っている。・・・俊介が望むなら人型の身体でいようか？』
俺にとってはマントよりも人型のほうが話しやすいし・・・よし！
「ああ、頼む」
すると『オシリス』は『了解した』と言って何かを唱える。
次の瞬間、『オシリス』はマントではなく長身で細身の男性へと姿を変えた。
『こんな感じでよろしいのかな？』
「ああ」と言って俺は親指を立てる。
「あの～。さっきから独り言を言ってるところ申し訳ないんですけど・・・そろそろ先生達の所に行かないと」
おっと、うっかり忘れてる所だった。この後俺は魔法の特性を調べ

ないといけないんだったな。
しかし、俺はどうやらエアリスに独り言を呟く変な人と思われてしまった。正直に言うと悲しい。
「何だ、屑マスターよ、貴様はまだ魔法の特性を調べてなかったのか」
俺はティアに脛を思いっきり蹴られて絶句する。
「なにすんだよ！！お前は！！」
激怒する俺に対してティアはというと。
「おい小娘。さっさと案内しろ」
エアリスに命令していた。
「おいティア！初対面の人に対する礼儀がなってないぞ」
「仕方なかろう、先代のマスターがこの口調で喋るようにさせたんだ」
あの変体爺さんの所為だとは俺も薄々思ってたけどさ。
「それでも初対面の人に命令口調はどうなのさ！人として」
「残念なことに私は人型の『使い魔』なのでな、人間の礼儀など知らぬ」
こいつはマジで一発殴ってやろうかと俺は本気で悩んだ。
「まあまあ、礼儀については後で話すとして、さっさと行こうよ」
エアリスは苦笑いをして、歩き始める。
くそう！何でこんなやさしい子が困る状況が存在するんだよ。
『まったく、そのことに関しては同感する』
「お前、俺の考えてることが解るのか？」
『言っただろう。私とお前は一心同体だと。なのに君は声に出すから変な人と思われるのだ』
それを最初から言えよ！
『すまんな、あまりにも君が馬鹿だったのでな』
こいつもうぜぇ。

暫く無言で歩いていたら校舎に着いた。
校舎の造りはレンガで出来ているようだ。
レンガで建物を造るって事は、地震が起きないのか？
前にテレビか何かでそんなのを聞いた気がする。
校舎の造りはどこかヨーロッパの歴史的建築物を連想させる造りだった。
すると、校舎の入り口に教師らしき人物が数人立っている。
その内の一人には見覚えがある。
エアリスの姉だ。
エアリスを大人の女性にしたらこうなるんだなと思わせる女性だ。
エアリスの姉は俺に向かって告げる。
「あれ～？何か増えてないかな？」
俺は口をつぐんでしまう。
此処で「遺跡の地下で勇者の遺産を手に入れました」何ていったら何をされるか解ったもんじゃない。
『君の対処は正しいぞ、俊介。しかし、使い魔のほうは懸命な判断が出来るかは微妙だがな』
そう言って『オシリス』はティアを指差す。
俺もティアを見る。
「私はこの屑なマスターの使い魔だ。ついさっき遺跡の地下で契約をしてきたところだ」
この子は馬鹿ですかっ！
「おいティア！何で喋るんだよ、お前は」
俺達の会話を聞いて老人が話しかける。
「失礼。君はあのカプセルのしたの文字が読めたのかね？」
黒いローブを纏っている老人だった。長い髪と髭は白くなっており、いかにも賢者のような人だ。
「あの、貴方は」
俺には大体の察しはついているが、此処で聞くのが礼儀というものだ。

「私の名はクルーガー・ワイズマン。御覧の通り、この学校の長じゃよ」
やっぱり校長さんか。
「俺の名前は柏木俊介です。この世界には知らないうちに来ていたので、どうやって来たのかは解りません」
校長、クルーガーさんは柔和な笑みで俺に言う。
「その事はもう知っているよ。そんなことよりも、君の特性を調べて入学に値するかを調べなくてわならん」
「え？入学・・・・ですか」
俺はちょっと驚きすぎて軽く放心状態になった。
「君が特性で基準をクリアして、入学出来なければ不法入国及び不法侵入で国に突き出さねばならぬ。しかし、君が我が校の生徒であればこの件は黙認できるのじゃよ」
この人、すげぇ優しい！！
俺は感動のあまり校長の手を握って何度も振った。

こうして俺は教師達に連れられて魔法の特性の検査を受けた。
この学校の入学基準はどれか一つの魔法の種類が５ランクのうちの３ランクあれば大丈夫のようだ。
「落ち着いてないと結果が悪くなるかもよ～」
エアリスの姉が俺にそんなことを言う。
寧ろそんなことを言うから緊張するんだと俺は思うよ。
検査は簡単。魔法の特性を調べてくれる魔道書『ミスター』に手を翳すだけ。
そうすれば後は『ミスター』が読んでくれるらしい。
俺は魔道諸『ミスター』に手を翳す。
すると、魔道書が光った。
光った魔道書は機械的な口調で喋りだした。
『これより柏木俊介について基本情報の解析を始める。柏木俊介。慎重１７２センチ、体重５８キロ。生年月日は不明だが歳は１６歳。

出身国・・・不明。』
そこで魔道書は言葉を区切る。
『続いて、基本魔法の特性検査を始める。・・・炎の特性０。水の特性０。氷の特性０。風の特性２。土の特性０。雷の特４。闇の特性１。光の特性０。』
おいおい、今のところ基準超えてないぞ俺！
『続いて、特殊魔法の特性検査に入る。・・・肉体強化の特性ランク外。空間魔法の特性ランク外。治癒の特性０。状態変化の特性０。』
『最後に所持している魔道具についての検査。・・・人型使い魔ランク外を一匹だけ所持。同化型魔道書、『オシリス』ランク外を一冊所持。以上』
これで検査は終わったみたいだけど、前半の評価は酷かったけど、雷で通ったみたいだ。
しかし、『ランク外』ってどうなんだろうか？
俺はエアリスの姉に聞いてみる。
「あの、『ランク外』ってなんですか？」
エアリスの姉は何か考えていたのか、反応が少し遅れた。
「『ランク外』とはランク５を超えていることよ」
つまり、俺は余裕で合格したというわけだ。

その後は普通だった。
書類と制服と街の地図えお貰った。
クラスとかは明日職員室に来たときに教えてもらうことになった。
最後に俺の家なのだが、さすがに一人で暮らすのは許してはもらえなかった。
そのことに俺は納得していたから別に反論なんかはしなかった。
結局俺の住む家はエアリスの家になった。
理由は二つ有る。
一つ目、教師が居る。

二つ目、同じ歳の子が居るからだそうだ。
エアリスト姉もそのことに反論はしなかったことが俺には少しうれしかった。
帰る前に、今更だが自己紹介をすることになった。
「まずは、保護者のあたしからだね、あたしの名前はヴェーチェル・アンジェラス。エアリスの姉だ。得意魔法は風と治癒。よろしくね」
俺はヴェーチェルと握手をする。
「私の名前はエアリス・アンジェラス・・・よろしく」
俺はエアリストも握手をする。
「俺の名前は柏木俊介。こっちが使い間のティア・ファミリア。んで、俺の右腕に同化してるのが『オシリス』」
ティアは軽くお辞儀をする。
ティアがおとなしくしているのが俺には以外だった。
普段なら「よろしくな、屑共」とか言いそうだから。
「さっさと帰ってご飯の用意をしましょう。今日から家族が増えたんだからさ」
ヴェーチェルは笑って歩いていく。
家族。俺にとっては結婚するまで体感することはなかったであろうことだ。
こうして、俺には新しい家族が出来て異世界での一日目は終わった。

異世界での人生の分岐点（後書き）

ようやく。ようやく学園物になる兆しがきました。
キーワードに学園物とありながら5話目の時点で学園要素がなしでしたが、
ついに学園物になりそうです！

初めての学園生活その１（前書き）

今回から学園物になりました！
学園物が嫌いな方は申し訳ありませんが
暫く学園物が続きます。

初めての学園生活その１

異世界に来て二日目の朝。
俺、柏木俊介（かしわぎしゅんすけ）はエアリスとヴェーチェルの家に居候させてもらっている。
俺が貰った部屋は東側に窓とベッドがあるので朝日が差し込んで目が覚める。
この部屋には基本的な家具はすべてそろっているので今の所困っている事はない。
いや、一つだけ困っていることがある。
ベッドがもう一つ欲しいことだ。
現在この部屋にはベッドが二つしかないが、人と人型の少女が一人居る。
つまり、俺は青い髪と眼を持つ１２歳前後の少女と一緒に寝ている状況に陥っているわけである。
まずい、非常にまずいぞこの状況。
俺だって一端の男子高校生。例えロリコンでなくてもやばい。
『良いじゃないか。襲っても。彼女は君の使い魔だ。主の性欲の捌け口なっても文句は言わないだろうさ』
そういうのは他人には見えず、俺の右腕と同化した魔道諸『オシリス』。
今は人型の身体をしているが、本当の姿は俺も知らない。
あのなぁ～。別に俺は性欲がどうこうじゃなくて、やりずらいだけだ。
俺と『オシリス』は一心同体なので、心で喋れば会話が出来る。
『そうか、ならばティアをエアリスの部屋に預ければ良いだろう？』
そうか！その手があったな！！
俺が解決策を見つけたと同時に少女が入ってきた。
彼女の名はエアリス。黒髪のショートカットで、身長は平均ほどの

優しくてあまり喋らない子だ。
「朝ごはんが出来ました」
俺は「了解」と一言言ってからティアを起こす。
「おい起きろティア。朝飯だってよ」
・・・・起きない。
俺は『オシリス』に助けを求める。
『簡単だ。命令すればいいだけだ』
命令。
「起きろティア。これは命令だ」
すると、パチッとティアの目が覚めた。
俺とティアとエアリスは階段を下りて朝食を食べる。
すると、台所からヴェーチェルがやってきた。
ヴェーチェルはエアリスの姉で、黒い髪は腰まで伸びていて、俺が通うことになった学校の教師である。
「いや～運が良いね君も。まさか転校してくるのが４月の終わりだから、まだクラスのこと馴染める筈だよ」
なるほど、今この世界は４月なのか、俺はそこで思い出したように左腕を見る。
腕時計は止まっていた。
壊れたのではなく、意図的に止まっているようだった。
なんで止まったのかは今は関係ないか。
こうして、朝を俺は迎えた。

転校生である俺は教師のヴェーチェルと共に職員室に来た。
「君は一様あたしらの親戚扱いにしとくから」
ヴェーチェルは小声で話す。
暫く進んで止まる。
「しゅんすけ。こちらの人がお前のクラスの担任の先生だ」
俺の担任となる教師は・・・・普通だ。
眼鏡をかけており、普通の服を着ている。

「ああ～。君が異世界からやってきた子だね？」
教師は俺のことを知ってるようだ。
『私の名はイグニート・ヴァルカン。炎の使い手だ。よろしく』
「どうも」
俺と教師、イグニートは握手を交わす。
「さ、あんたはエアリスと同じクラスにしてもらったんだから、このチャンスを逃さずに友達を作りなさいよ」
俺の背中をバンバン叩いてヴェーチェルは去っていった。
確かに、友達を作っておかないと魔法のことに関して解らない俺には大きな問題となる。
「さ、行こうか、かしわぎ君」
俺は先生と共に教室に向かった。

高等部一年A組、此処が俺のクラスになるようだ。
先生に少し待つように言われた俺だが、何か忘れているような気がする。
『俊介。忘れているのはティアのことか？』
「ああ！！それだ！」
すっかり忘れていた。
でもあいつはどこに居るんだ？
『そこで君の特性を使うんだ』
俺の特性で探すのに使えるのなんてあるのか？
『君は空間魔法は『ランク外』。ならばティアを思えば行けると思うぞ』
でも、俺には間寮の練り方とか知らないんだぜ？
『その為に私が居る。私が魔力の練り方を知っていれば、同化している君の知識として使えるはずだ』
俺は『オシリス』の言うとおりに記憶を探る。
ある。確かに魔力の練り方を俺は知っている。

「よし、これでティアを探せる」
俺は目を閉じて魔力を練りながら、ティアを思い浮かべる。
次の瞬間。俺は廊下から消えた。

フッ。と、音が聞こえたかと思うと俺は移動していた。
「ここは・・・家じゃねえかよ」
そう、ここは俺達の家だった。
『寧ろこれはラッキーだ。知らないところよりはましだったな』
たしかに、これでさっさと帰れる。
ティアはすぐに見つかった。
寝ていたんだ。それも、朝飯を食ったテーブルで。
「こいつは・・・・」
『落ち着け俊介。彼女は５００年間も眠っていたのだ。いつもなら眠っていたからその所為だろう』
俺は落胆してしまっていた。
「で、こいつをどうする？」
『とにかく学校まで一緒に戻ってから決めよう』
こうして、俺はティアを連れて学校の廊下に帰った。

俺が帰るとちょうど俺の紹介するときだったようだ。
もう少し遅れていたらどうなってたか。
俺は教卓の横に立つ。
クラスの人数は４０弱。多いほうなのかもしれない。
俺は深呼吸してから自己紹介をする。
「始めまして、柏木俊介です。自分はヴェーチェル先生と、そこにいるエアリスさんの親戚のものです。この抱えているのは自分の使い魔で、名前はティア・ファミリアと言います。よろしくお願いします」

俺は自己紹介した後に一礼した。
すると、先生から得意な魔法とそのランクを言ってくださいと言われた。
「得な魔法は、肉体強化と空間魔法です。ランクは共に『ランク外』と言われました」
その瞬間クラスがざわめいた。
どうやら俺の言ったことが珍しかったらしい。
なぁ、『オシリス』。『ランク外』はそんなに珍しいのか？
『『ランク外』は一つ持っていればそれだけで異例なのに君は二つ持っているんだ。このことが解るか？』
なるほど、簡単に言うと、チートコマンドを二つ持っていることか。
こうして俺の学校でビューの自己紹介が終わり、ＳＨＲは終わった。

次から授業か。
俺の学園生活一日目は初めてのことが沢山おきそうな予感がした。

初めての学園生活その１（後書き）

今回から暫くは、一つの話をパート分けにしてやっていきます。

初めての学園生活その２（前書き）

まだ一日目が終わる予定はありません。
書きたいことが多いので、ご了承ください。
次で一日目は終わるかもしれません。

初めての学園生活その2

一時間目前の俺の現状を紹介しよう。
1、先生の計らいでエアリスの隣の一番端の後ろから二番目の窓際という絶好のポジションを確保している。
2、その席でまた眠ってしまったティアを抱えている。
3、次の授業の準備をしようとしている。
そして最後に一つ。
クラスの視線が恐ろしく痛い！！
やめて！そんな「何あのダサいの～」みたいな目で俺を見ないで！！
「おい！転校生。その娘は・・・お前の使い魔だっけ？」
そんな俺に後ろの席の奴が声をかけてきた。
声をかけてきたのは炎みたいな赤い髪と眼を持っているいかにも暑苦しそうな少年だった。
「えっと・・・君は？」
少年は「わりぃ。自己紹介がまだだったな」と言って笑う。
少年はかなりのイケメンの部類だなと俺は思った。
俺の予想でしかないが、彼を見て何となく彼の魔法の特性は炎何じゃと思う。
イケメンの少年は咳払いをして自己紹介を始める。
「俺の名前はブリッツ・メティオール。魔法の特性は雷と土だ。ランクは共に『4』だ。よろしくな、転校生」
違った・・・特性は見た目で決まるんじゃないのか？
『当たり前だ俊介。特性はその人物の持っている魔力がどの魔法の何に向いているのかを調べるものだ。外見で決まるのなら君なんか闇が似合うと思うぞ』
確かに『オシリス』の言う通りだ。
見た目で決まるのなら調べる必要はないのだから。
俺は自分の予想が外れたことに関してはもう考えるのをやめ、ブリ

ッツと握手をした。
これで俺に始めての『友人』が出来た。
その後の俺はエアリスとブリッツと色んなことを話した。
話をしている途中で俺は最初は気にしていた周りの視線だが、もう気にしてはいなかった。

一時間目の授業の内容はまったく理解が出来なかった。
この世界の歴史の授業なんて俺には解るはずがない。
何故かと言えば俺はこの世界の文字が読めないので、黒板に書かれる文字が解らないのだ。
しかし、俺は何故文字が読めないのに喋れるのかに疑問を感じる一時間目は終わった。

二時間目から昼休みまでの間、俺は何故この世界の人と会話が出来るのかを考えていた。
どうやらこのことには『オシリス』も解らないようだ。
途中、エアリスが授業を聞かなくても良いのかと聞いてきたのだが、生憎だが俺には魔道書があるので必要な知識は『オシリス』の中にあるから大丈夫だと伝えておいた。

そんなこんなで昼休み。
俺はエアリストブリッツと共に食堂に向かった。
食堂に向かう廊下で俺たちは変な二人組みに出会った。
「ごきげんよう。凡人の皆様。これからどちらに行く気かしら～？」
滅多に聞くことはないであろうお嬢様言葉を使う少女と、
「やめなよオプジディアン。こんな凡人どもと喋っていたら高貴な僕たちの血が穢れかねないだろう？」
今度は一発殴れば「ママに言い付けてやる～」とか言って泣いて帰

りそうな奴が喋る。
それにしても、さっきから凡人、凡人って、何様のつもりだよ。
「退いてくれよ二人とも。俺たちはこれから食堂に転校生を案内しないといけないんだよ」
ブリッツが何だか喧嘩腰の声で言う。
仲でも悪いのだろうか？
「まぁ！この凡人ったら、貴族であり土と闇のランク『5』であるこのオプジティアン・アップグルントに命令するのですか？」
カールしている金髪。きれいな青い瞳をもつオプ何とかはオーバーリアクションすぎる大げさな声で驚く。
「おいおい凡人。同じく貴族で水と光のランク『5』の僕、カルディナ・ファウンテンに命令するのかい？」
今度は栗色のショートヘアーで琥珀色の瞳を持つ少年、名前は・・・・
泣き虫で良いか。
が、またもやオーバーリアクションをする。
それにしてもこの二人、うるさいし、いちいち上から目線だし、確かにブリッツが嫌うのも解る。
しかもこの二人はまだ何かを喋っているようで周りの人達からもいやな目で見られている。
ここで俺は何と言えば良いだろう？
『君の思う最適な言葉を言えば良いんじゃないのか？』
最適な言葉が見つからないから苦労してんだろうが。
『どうやら彼らは自分達が貴族でランクが高いから我が物顔のようだな』
だから何だよ。
『ならば簡単だ。君がランク『外』だと言えば彼らは立ち去るのかも知れんぞ？』
そうか！その手があるんだな。
俺は邪魔な彼らに何を言うかを決めたのでブリッツの肩を持って前に出る。

「おい！何すんだよ転校生」
ブリッツが俺に文句があるのか、はたまたこんな奴らに俺を関わらせたくない良心なのかは解らないが、ブリッツが俺に叫ぶ。
「まぁ落ち着けよブリッツ。それにお前らも」
俺は二人の貴族を睨み付ける。
「１０秒待つ。１０秒以内に此処を退かないのならお前達を校庭に移動させる」
二人の貴族は何を言っているんだという顔をしていた。
俺も初対面の人間にこんなのを言われてもなんとも思わないだろう。
まして彼らは最高ランクの特性を持っているのだから当然退くわけがない。
こうして１０秒はあっという間に過ぎた。
しょうがない。やるぞ、『オシリス』
『場所は校庭で良いのか？何なら大空という選択肢もあるぞ？』
それは死にかねないからやめておく。
それに、俺は殺したいわけじゃないからな。
『了解した。いつでも良いぞ』
俺は目を閉じて『オシリス』の記憶を探って魔力の練り方を探す。
見つかった。
俺が魔力を練りだすと同時に右腕も光る。
多分、『オシリス』が起動しているからだろう。
俺は空間魔法を使う過程で校庭を思い浮かべる。
直後、フッと音を立てて二人は消えた。
周りの人間はざわざわと何かを喋るが俺はそんなのを気にしない。
俺は何気なくエアリスとブリッツに一言。
「なぁ、早く食堂に行こうぜ」
二人はまだ納得していないような顔で歩き出す。
俺は二人の後ろに付いて行った。

初めての学園生活その２（後書き）

書くことがなくなってきました。
それよりも誰か読んでるのかも不安です。
また今回は主人公の空間魔法は相手も移動させることが出来ることにしています。
この力は反則かもしれませんが、そうでもないです。
自分の知っている所にしか移動させれないからです。
この辺のバランスが難しいです。
ではまた次話を見てくれることを祈っています。
最後になりましたが、新年明けましておめでとうございます！！

初めての学園生活その３（前書き）

やっぱり終わりませんでした。
ごめんなさい。

初めての学園生活その3

結局、俺はエアリスとブリッツの二人にあの貴族をどうやって消したのかを説明することになっている。
俺達が今居るのは学校の食堂。
食堂っていうよりはレストランに近い。
ウェイトレス達が忙しそうに学生達のオーダーを聞いて走り回っている状況だ。
俺の隣にブリッツ。反対側にエアリスが座っている。
「まず、お前に話を聞く前にメシでも食わないか？」
ブリッツは余程腹が空いているのか、今すぐにでもテーブルの端にあるコールボタンを押しそうな勢いだった。
そこにエアリスが「決めてる最中だから待ちなさいよ」とブリッツを押しとどめる。
俺ブリッツからメニューを貰ったところで重大なことに気づく。
「あっーー！！」
突然の叫びに二人と学生とウェイトレスが驚く。
「どうしたんだよ転校生。急に叫びだして」
ブリッツが俺に話しかける。
俺はブリッツとエアリスにあることを話す。
「ティアを教室に置いてきた」
そのことに二人も驚きを隠せず口を開けている。
『別に構わんだろう？命令で呼べば良いだけの事だ』
どうやって？と俺は『オシリス』に質問する。
『アレは君の使い魔だ。君が心で呼べば、君の魔力を探して此処に来る』
本当か？でも、此処の学生は全員魔法使いだぜ？特定の魔力だけを感知できるのか？
『君はランク『外』の魔力だ。見つけるのは容易い』

俺は深呼吸をしてティアに向かって心で呼ぶ。
此処に来い。
すると、俺の膝の上が光りだした。
「おい転校生！今度は何やったんだよ！」
ブリッツは椅子から転げ落ちた。
「知るか！おい『オシリス』！！これは何だ！？」
『これは使い魔の良く使う転移魔法だ』
転移？じゃあ此処にティアが来るのか？
『そういうことだ。しかし、不味いな』
何が不味いんだよ？
俺の質問に『オシリス』は答えにくいのか口を噤む。
しかし、ついに質問に答えた。
『普通使い魔は動物だ。だから転移は別に問題は起きない。しかし、アレは人型だから服を着ているのが問題だ』
なんでだよ。
『転移は使い魔を飛ばす。つまり、服は教室に残る』
その言葉に俺は全身が震えるのを感じた。
直後、素っ裸のティアが俺の膝の上に座る。
俺は一目散に食堂を走り去った。
目的場所は教室だ。

何とかティアの服を探し出せた俺は、昼飯を食おうとするとチャイムが鳴った。
こんなの、理不尽すぎるだろおおおお！！
俺は教室の床に蹲り拳を床に叩きつける。
すると、床がバコォと音を立てて崩れ落ちた。
「へ？」

俺は何とも間抜けな声を出して下の教室に落ちた。
落ちる瞬間に『オシリス』がこんな事を言ってきた。
『君が無意識に肉体強化の魔法を使ったようだな』
俺は無意識に使ってしまった魔法で下の教室に落ちた。

初めての学園生活その３（後書き）

いつも、誰かが読んでいることを願いながら書いています。
更新できなかったのは受験勉強の影響でした。
これからもなるべく更新していきたいです。
それでは、また次回。

初めての学校生活その４（前書き）

最初に謝ります。すいませんでした。
気づいた人も居ると思いますが、
前話でのタイトルを間違えていました。
久しぶりの投稿で間違えていたのです。
訂正しましたが、おや？と思った方。
別に何の伏線でもありません。
ただのミスでした。
申し訳ありませんでした。

初めての学校生活その４

俺は無意識に使ってしまった魔法の所為で教室の床を殴り壊し、現在は下の階の教室に居る。
激しい痛みは・・・無い。
周囲には瓦礫が落ちているのだろう。
ガラガラと硬いものが落ちる音が聞こえる。
粉塵の所為で周りが見えない。
手探りで周りに手をやると何かに当たった。
柔らかい感触。
俺にはこれが何なのか解る。
これは・・・胸だ。
それもなかなかの大きさだ。
この世界に来る前の俺は達也（たつや）と一緒に胸について一夜を語り明かしたほどのマニアだった。
でも、まさかこんな所で揉めるだなんて、最高すぎる。
俺は胸に当たった手を離してグッと握る。
すると、粉塵が消えて俺が揉んだ胸の主の顔が見える
その顔には見覚えがあった。
今は気絶しているようだが俺はこの人物を知っている。
そう、あれは食堂に行く途中。
って、何だ、オプ何とかかよ。
俺ががっかりした調子の声で言うとオプ何とかがいきなり目を開けて俺の耳元で怒鳴る。
「王の騎士団の団長である貴族の娘である私、オプジティアン・アップグルントに向かって何と無礼な言葉を使うのですかこの凡人は！！」
こんな正確でなければそれ相応にモテそうなのに、損しているなこいつは。

「はいはい、悪うございましたね」
俺は適当な調子で答える。
すると教室のドアが開いて少年が出てくる。
「大丈夫かい？オプジティアン！？」
出たよ、泣き虫君が。
俺は駆けつけてきた泣き虫にこいつは大丈夫だと伝えた。
「黙りたまえ凡人。君の言葉を僕は信じない。僕は自分の目でオプジティアンが無事かを確認する」
こいつ・・・人がせっかく親切に言ったのによ。
あれ？そういえば、泣き虫が着てから教室に人が居なくなってる気が・・・・
「なあ、お前何かやったのか？」
俺は泣き虫に質問する。
「僕が？誰に、何を」
俺は泣き虫の質問にきちんと答える。
「お前が、教室の人間に、此処から居なくなるような何かを」
その瞬間、泣き虫がピクリと反応する。
「君は僕を馬鹿にしたいのかい？」
「寧ろ、今の発言のどこに馬鹿にした要素があるのかを教えて欲しいくらいだよ」
だって俺はきちんと答えたに過ぎないんだから。
「解った、そこまで馬鹿にしたんだ、責任を取ってもらうよ」
「責任？」
まさか、死ぬとかそん何無しだぞ！？
俺の思う責任とは違う言葉が泣き虫から出た。
「僕と決闘だ」
決闘・・・何の？
『決闘とは、魔法を使っての勝負のことだ』
教えてくれてありがとさん。
一対一なら負ける気がしないから断る理由も無いか。

決闘を受けようとした俺にオプ何とかが声を掛ける。
「お待ちなさい、この決闘。私も参加します」
「何でお前までもが！？」
おいおい、一対二なら負けるかも。
「勿論、貴方も誰か一人を仲間にしても良いですわ」
と一言言って二人は教室から出て行った。
此処はお前の教室じゃあねえのかよ。

自分の教室に戻った俺はブリッツとエアリスに今日の放課後に決闘することになったことを伝えた。
相手は泣き虫とオプ何とか。
三人で話し合った結果、俺の仲間はティアに決まった。
「頼むティア。決闘に参加してくれ」
俺はティアに頼みこんだ。
答えはＹＥＳ。
当然だろうな。俺の使い魔だし。
こうして決闘することになった俺はどう戦うのかを『オシリス』とティアと話し合うことにした。

初めての学校生活その４（後書き）

次からはいよいよ魔法対決です。
では、また次回。

初めての学生生活その５（前書き）

一日目が終わる気がしません。
すいませんがもう暫く待ってください。

初めての学生生活その5

学校生活初日の放課後。
俺はこの世界に始めて来た時に倒れていた校庭にティアとエアリスとブリッツと共に来ていた。
此処に来たのは馬鹿にされたとか言ってきた貴族二人とティアと共に決闘するためだ。
「よく逃げ出さずに来た事は褒めてあげるよ、凡人」
と、俺に決闘を申し込んできた短髪で茶髪、琥珀色の瞳を持つ少年。
名前はまだ知らないが見た目から俺は泣き虫と呼んでいる。
そしてその泣き虫の横で仁王立ちしているのはカールしている綺麗な金髪と青い瞳を持つ（かなり胸が大きい）少女。
名前はオプ何とかだ。
この二人は貴族らしくて我が物顔でここで学校生活を送ってるようで周りの生徒からも嫌われているようだ。
ま、そんなことは俺には関係の無いことさ。
「で、決闘の勝敗はどうやって決めるんだ？」
俺が泣き虫に質問する。
すると泣き虫は前髪を払って偉そうに言う。
「簡単なことさ。参ったと言えばそれで終わりだ」
何だ、用は普通の喧嘩と同じか。
「但し。敗者には罰が与えられる」
そこで泣き虫は言葉を区切る。
「罰・・・ね。で、その罰って一体何をやれゃあ良いんだ？」
と、今度は泣き虫では無くオプ何とかが話す。
「敗者が勝者の言うことを何でも一つ聞く」
二人の貴族は満面の笑みを浮かべている。
こんな事を言うって事は、こいつ等は勝つのが前提のようだな。
『そのようだな』

俺の心の呟きに対し細身で長身の人型でいる魔道書『オシリス』が答える。
でも、負けることも考えないで良いのかよ？
『彼等は自分達が貴族であり、尚且つ天才だから負ける理由が見つからんのだろう』
でも、昼休みのときに俺に飛ばされただろう？
俺は昼休みのときにこの二人を校庭に飛ばしたことがある。
これも決闘の理由の一つだろう。
『アレは油断していたからだと考えているのかも知れんな』
なるほどね。
俺が『オシリス』との会話が終わった頃にブリッツが俺達の真ん中に歩いてきた。
「これより決闘を始める」
ブリッツが腕を正面に突き出す。
「負けんなよ。転校生」
ブリッツが俺にウィンクをする。
「ああ、任しとけ」
俺もブリッツにウィンクは・・・しなかったが気持ちは伝わったと思う。
直後、ブリッツの腕が上げられた。
「始め！！」
こうして決闘が始まる。
まず始めに動いたのは泣き虫だった。
泣き虫は掌を俺の方に突き出すと白い液体が飛んできた。
俺はそれを難なく交わす筈だった。
ガチリ。と足元の土が俺の脚を飲み込んでいた。
これは・・・マズイ気がする。
俺は泣き虫の後ろに居たオプ何とかを見る。
あいつの魔法が俺の脚を止めてるのか！
白い液体はもう俺の目前まで迫ってる。

やばっ！
俺は目を閉じる。
しかし、痛みは感じられない。
俺は恐る恐る目を開けた。
するとそこには・・・・青い髪を持つ少女ティアが白い液体を片手で受け止めていた。
「ティア・・・お前」
ティアは後ろを振り返る。
「安心しろマスター。私はすべての魔法をある程度操れる。それに」
そこでティアは言葉を区切る。
「私の特性は水。貴様の高水圧のカッター等効くわけも無かろうが！！」
そう言ってティアは水のカッターを掌に集めて一つの剣を作った。
「さあ、何をしているマスター。楽しいダンスの時間だぞ？」
俺は空間移動で埋まった脚をリセットする。
「ああそうだな・・・反撃の時間だ」
俺達は一斉に泣き虫に向かって走り出す。
「う・・うあああああ！！」
泣き虫は水の塊を投げる。
しかし、ティアはこれを先ほど作った水の剣で難無く切り裂く。
その隙に俺は肉体強化の魔法で強化した拳を泣き虫の顔面に叩き込む。
ドッゴオン！！と轟音が鳴る。
泣き虫は１０メートル程ノーバウンドで吹っ飛んでオプ何とかの足元で気絶した。
「ひっ」
オプ何とかは足を竦ませ、小さな悲鳴を上げる。
なんだかなぁ～。ああいうのをやられると殴りにくくなるんだよな。
実際俺は女の人を殴った経験は無い。
だから、此処は殴らずに解決したいのが俺の本音だ。

そこで俺はこう言った。
「なあ、負けを認めてくれないか？」
オプ何とかは小さな声で「貴族の誇りに掛けても負けを認めるのは」とか言っている。
ティアは「コイツ殴って帰るか？」的な目線をこっちに送ってくるし。
悩んでいる俺の後ろに何かが落ちてきた。
ドシン！！と音を立てて大きな岩が落ちてきた。
「何だ？・・・アレ」
俺が近づこうすると、
岩が割れて中から化物が出てきた。
全身を岩で包まれている竜とも犬とも思える姿。
不気味に口から黒い煙を吐くその生き物は俺達に向かって襲い掛かって来た。
直後、俺は自分の横腹に噛み付かれるのに気づくのに数秒掛かった。
そこで俺の意識は途絶えた。

初めての学生生活その５（後書き）

今回は魔法の戦いをあまり詳しく掛けませんでした。

初めての学校生活その６（前書き）

今回で一日目はようやく終了しました。
長いけど、書いてて楽しかったです！！

初めての学校生活その6

俺はほんの数秒前、二人の貴族相手にティアと共に決闘をして勝った。
その直後に変な岩が落ちてきて中から大きさ3メートル程の岩で出来た竜とも犬とも思える化け物が黒い煙を吐きながら俺に噛み付いてきた。
ゴキュリと音を立てて俺の横腹に化け物の牙が突き刺さる。
一番下の肋骨がバキッと音を立てて砕け散る。
そのまま化け物は首を二回ほど振って俺の体は飛んだ。
化け物が離したのではない。
肉と内臓が千切たんだ。
俺の横腹から地面に広がる内蔵と赤い血。
俺の意識は見る見る遠のいていく。
「あ・・・・ああ・・・」
意識がはっきりせず言葉も出ない。
周りでは誰かが叫ぶ声が聞こえるが俺には届かない。
こんな呆気なく死ぬんだな、人間は。
『君・・は、・・・死ぬ・・・の・・か？』
『オシリス』は俺と一心同体だ。
俺が死にかけているから『オシリス』も死にかけているようだ。
化け物はティアと戦ってるようだ。
俺は一歩も動けない。
目を閉じる。
誰かに誘われるようにゆったりと。
『まだ死ぬな。お前が死ぬのはまだ早い』
誰だ？
『お前はやるべき事を成し遂げてはいない。故に。まだ死ぬのは許されない』

誰かは俺に何かを言っているようだが聞こえない。
そんな俺には構わずに誰かは喋り続ける。
『お前の代わりに今は私が戦おう』
俺の意識はそこで途切れた。

俊介(しゅんすけ)が倒れた後も化け物は暴れていた。
ティアとブリッツそしてエアリスは生徒を逃がしながらも戦っている。
しかし、化け物は想像以上に強く、何人かの生徒は噛み殺され、身体を噛み切られ倒れていた。
「何なのこれは！？」
エアリスがブリッツに叫ぶ。
その間にも彼女は水の魔法で蒸気をつくり目を眩ませようと試みる。
しかし、化け物の黒い煙によって蒸気は消え去ってしまう。
「そんなの俺に解るわけねぇだろうがよっ！！」
ブリッツは化け物の突進を避けながら雷撃を浴びせる。
しかし、化け物の黒い煙が雷撃を逸らす。
「あの煙は魔力の塊か何かのようだな」
ティアは化け物を分析しながら攻撃をする。
ブリッツの土の刃の雨が四方から化け物に襲い掛かる。
しかし、頑丈な岩の肌を持つ化け物には効かなかった。
「クソッタレ！！何か方法は無いのかよ？」
ブリッツは二人に質問を投げ掛ける。
しかし、二人にも解決策があるわけもなく、彼等は化け物を牽制しつつ周りの生徒を逃がし、教師が来るのを待つことしか出来ないでいた。
突如化け物が激しい咆哮を上げて口から黒い光線を吐き出した。

それは地面を抉りながら三人を目掛けてやってくる。
激しい閃光が止み、三人は蹲っていた。
化け物はゆっくりと確実に三人を殺すために歩き出す。
三人の5メートル程近くまで来たときに化け物は足を止めた。
化け物はゆっくりと後ろを振り返る。
するとそこには、片方の脇腹は無くなり、尚も血を流し続けながらも立っている俊介の姿があった。
化け物は俊介を威嚇する。
黒い煙が辺りを包む。
「おい、お前には覚悟があるか？」
俊介はいつもとは違う重々しい声を出す。
対して化け物は咆哮する。
「そうか、お前には覚悟があるのか」
そう言いながら俊介は右手を前に突き出す。
「ならば・・死んでも文句は言うなよ」
直後、眩い閃光が二つぶつかり合う。
周りの地面は捲れ上がり、空気が割る音が聞こえる。
「なかなかの覚悟だな。だが、まだ足りんな」
そう言って俊介はさらに左手を突き出して閃光を出す。
化け物の出した閃光は飲み込まれ、化け物も飲み込んで消え去った。
化け物が消え、何人かの生徒が死に、エアリス達は気絶し、俊介も力尽きたのか、倒れた。

頭の中に声が聞こえた。
その声は何を言ったのかは解らなかったが、俺を助けてくれたことは解った。
そして俺は数分後に目を覚ます。
「ここは・・・ベッドか？」

「ええ、そうよ」
俺の独り言に答える男性の声がした。
男性はその後は黙々と自分の仕事をしていた。
俺はさり気なく自分の脇腹に手をやる。
治っていた。
俺は安心して気が楽になった。
でも、どうやって治ったんだ？
その直後にドアが開いて校長が入ってきた。
「あの、校長先生」
校長は起き上がろうとする俺を手で静止させ座る。
「君を連れて行かねばならぬ」
「何処にですか？」
誰でもこのことは聞くだろう。
校長の返事はこの時の俺には想像もできない所だったのはよく覚えている。
「国の女王に会わせねばならなくなった。今すぐ王宮に行くぞ」
王宮？・・・・って。
「えええええ！！！」
俺は驚きのあまりベッドから転げ落ちた。
こうして、俺の一日目はよく解らない終を迎えた。

初めての学校生活その６（後書き）

何だか、中途半端な終わり方を迎えましたが、
あの後のブリッツ達のことは次の話で出しますので、触れないでください。
次から女王様が出てきます。
どんな性格にするかを友人や皆さんのコメントから決めて、書いていきたいので次の更新は遅れるかもしれませんが、ご了承ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8518z/

【別世界】アナザーワールド

2012年1月10日21時48分発行